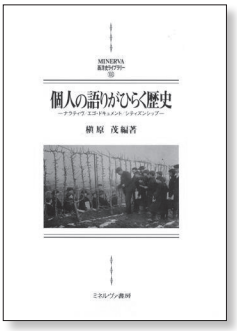

自著紹介

『個人の語りがひらく歴史
――ナラティヴ／エゴ・ドキュメント／シティズンシップ』

（ミネルヴァ書房、2014年10月）

槇　原　　茂
（島根大学教育学部共生社会教育講座教授）

今からおよそ100年前の19～20世紀転換期には、初期的グローバリセーションが進行する一方で、帝国主義的対抗と国民統合の進展、社会主義勢力の台頭、人種主義の広まりなどにより、シティズンシップ（市民の権利や資格､アイデンティティ）が問い直されました。そして、識字力の向上と交通・通信手段の発達により民衆層における社会的・文化的自己認識も組み直されるなかで「自分」を語った手紙、日記、回想録、自伝などが大量に生み出されました。近年、これらの史料は「エゴ・ドキュメント」と総称されます。

本書は、エゴ・ドキュメントをシティズンシップと関連させて読み解くことを目的としています｡その際、対象とする個人＝市民を、「自律的であろうとする個」として捉え、彼／彼女らのアイデンティティが共同性、公共性とどのように係わっていたのかを重視しています。

科研で共同研究をおこなった仲間たちによって、全７章のそれぞれにおいて、世紀転換期から20世紀前半に生きた個人の語りが読み込まれ、市民の歴史が紡がれています。これらの個人が暮らしたのは、ナチ体制下のベルリン、スターリン体制下の収容所､ニューヨークのユダヤ人街、メキシコの先住民地域、ロンドン港、ベル・エポックのパリ、フランス中部の農村とさまざまです。第Ⅰ部「アイデンティティを問う『自分』とシティズンシップ」の第１章は、ユダヤ人妻をもったアーリア人作家ヨッヘン・クレッパーがナチ国家による否認圧力に抵抗し、家族とともに自死にいたるまでの日記や書簡を読み解きます。第２章は、1920年代にトロツキー派に属したため収容所に送られ、スターリン死後に帰還した２人の人物、アンドレイ・ゾート

フとM.D.バイタルスキーの自伝的回想録を取り上げ、彼らにとってのシティズンシップの意味について考察しています。そして第３章は、アメリカ革新主義時代に生きた女性労働者、ローズ・シュナイダーマンの回想を分析しながら、彼女が自分のなかの「女性」「労働者」「移民」「ユダヤ人」という非「市民」的属性とどのように向き合ったかを論じます。

第Ⅱ部「新しい社会をもとめる『自分』とシティズンシップ」では、第４章が、1920年代以降のメキシコにおいて国家による先住民地域の文明化・近代化が進められた際、その尖兵の役割を負わされた農村教師の１人サルバドール・ソテーロ＝アレバロの自己認識の変化と市民的パフォーマンスを回想録からたどります。つぎに第５章は、ロンドン港湾労働組合運動の指導者ベン・ティレットの発言と、その後執筆された自伝の記述とのズレを手がかりにして、彼のシティズンシップ論の特徴を引き出します。他方第６章では、フランス第三共和政期の民主派司祭ピエール・ダブリの自伝を中心史料として、世俗的共和国に生きるカトリック聖職者がシティズンシップをどのように自己のアイデンティティに組み込み、民主政とかかわろうとしたのかが論じられます。さらに第７章は、ブドウ栽培農ジュール・ルージュロンの手紙の読解を通して、同じ第三共和政による国民統合政策の主なターゲットとされた農民層における書く行為・習慣が公共性や農村の共同性の変化とどのように関係していたのか、問いかけます。

さて、こうして本書は「ミクロな歴史」の可能性を問おうとしていますが、ここでは、本書にまつわるさらにミクロなエピソードを紹介したいと思います。出版社に入稿して数ヶ月後、編集会議でゴーサインが出たという知らせがありました。「Minerva西洋史ライブラリー」の１冊として出すので、ついては表紙カバーに載せる図版を考えておいてくださいという言葉が添えられていました。カバーの形式は同シリーズに共通のもので、書名の下には必ず図版が置かれています。この図版選びが意外にむずかしかったのです。

何しろ私たちの論集の主題は「個人の語り（パーソナル・ナラティヴ）」なので、テーマに直接かかわる図版といえば、日記や手紙の写真ということになりましょう。ところがこれらの断片的な写真を載せても、絵になりにくいわけです。そこ

で、むしろ抽象画やデザインはどうかという提案をしたら、シリーズの形式に合わないので、やはり写真など具体的な図像にしてほしいとの返事。思案の挙げ句、思い浮かんだのが第７章の主人公、ジュール・ルージュロンが地元の小学生にブドウの接ぎ木について解説している写真でした。ある本で見かけた写真が印象に残っていました。これなら「語り、伝える」というメッセージを込めることができるのではと編集担当者に提案すると、OKだが、できればもっと鮮明なものがほしいとのこと。うーむ、弱りました。

ここで、ルージュロンの子孫の方々とのご縁に救われることになります。2009年にフランスのアリエ県文書館で史料調査をおこなった際にたまたま地元紙の取材を受け、記事が掲載されたことがありました。そして2012年の秋、ルージュロンの孫のジョルジュ・ラグランジュさんから突然お便りをいただきました。マルセイユにお住まいでしたが、記事を読んだ知人が私のことを教えてくれたそうで、新聞社から私の勤務先を聞き出し、わざわざ手紙をくださったのです。とても感動しました。その後手紙のやりとりがありましたが、残念なことに翌年の夏に92歳で亡くなられました。その折に息子のステファヌさん、つまりルージュロンの曾孫にあたる方とも幾度かメールを交換していました。

写真の話にもどります。鮮明な画像を入手するには、直接カメラで撮影するしかありません。一方で、出版予定の10月まであと２ヶ月ぐらいしか残されていません。こうなったらダメ元、写真を貸してもらえないかステファヌさんにきいてみることにしました。ところが届いた返信には、アルジェリアの石油プラントに出向中で、マルセイユで保管しているルージュロンの文書を探すのは無理とのことでした。ただ、パリで法学を学んでいる甥のベルナール・ブドゥーさんがバカンスで８月末にマルセイユに帰るはずだから、彼に探してみるよう頼んでおくとのことでした。とても間に合いそうにありません。万事休す、やはり本に載っている写真を使うしかないかとあきらめかけていた矢先、ブドゥーさんが帰省をすこし早めたとのことで、なんと件の写真がメール添付で送られてきたのです。すぐに出版社に送ると、なんとか間に合うという返事でした。どれほどうれしかったことか……。人の縁のありがたさに心打たれました。ですから、もし本書を

手にとっていただけるなら、カバーの写真にも目を留めてやってください。子どもたちの表情までわかるはずです。

私は、「神は細部に宿る」、「ミクロな歴史にこそ真実が隠されている」などと言いたいわけではありません。ただ、何かにつけて「グローバル」流行りで、歴史学においても「グローバル・ヒストリー」なる潮流が勢いさかんなさまを見るにつけ、大事なことは他にもいろいろありますよと言いたくなるのです。グローバル・ヒストリーが従来の国家・国民を主語にした歴史の見方や語り方を変革してきたことは認めますが、歴史のオルタナティヴは多様であってよいと思います。最近、フランス革命史の泰斗リン・ハントさんが新著のなかで、同じようなことを――ずっと洗練された議論で――言っておられることを知りました。権威づけるつもりはないですが、まんざらでもない気分です。私にとって、無名の個人の歴史を探究し、叙述することは、ミクロな世界に耽溺することではありません。そこから、関係がつながり、世界が開かれることが大切だと考えています。ちょうど私たちの人生のように。